親子、別あり

三浦太郎

曽野綾子

sono ayako

親子、別あり

三浦太郎
野綾子

PHP

〈著者略歴〉
曽野綾子（その　あやこ）
1931年、東京生まれ。作家。
著書に、『誰のために愛するか』（青春出版社　角川文庫）『神の汚れた手』（朝日新聞社　文春文庫）『天上の青』（毎日新聞社）『夫婦、この不思議な関係』『都会の幸福』『失われた世界、そして追憶』『大説でなくて小説』（以上、ＰＨＰ研究所）など多数ある。

三浦太郎（みうら　たろう）
1955年、東京生まれ。
南山大学大学院博士後期課程修了。専攻は文化人類学、宗教民族学。現在、英知大学文学部国際文化学科助教授。
著書に、『太郎家族のボルネオ日記』（共著　河合出版）『花とおじさん』（ＰＨＰ研究所）『太郎&太一物語』（女子パウロ会）がある。

親子、別あり

1993年４月23日　第１版第１刷発行
1993年６月10日　第１版第３刷発行

著　者　曽野綾子
　　三浦太郎
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町３番地10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431

印刷所
製本所　凸版印刷株式会社

©Ayako Sono, Taro Miura 1993 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。
ISBN4-569-53937-8

親子、別あり　目次

返事の書かれる遺書・5
何を選んで生きるか・17
忘れられる幸福・29
風呂の中の都会・41
少し愛して、深く愛さない・53
そっと感謝する日・65
日本ではない国で・78
水土、適・不適・90
バランスを保つ知恵・102
人のしたことは謝れない・114

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

胎児以前の人々・126
シンガポールのアパート暮らし・138
裏と表のある態度・150
カラオケの迷惑・162
新聞が犯した罪・175
「ヘリキア」が命じるものに……・188
寛大さから愛は生まれる・201
人生の決算・213
あとがき

裝幀——菊地信義

返事の書かれる遺書

太郎へ

遺書のつもりで書きます。

でもあまり本気にしないでいいの。大体、遺書を書きたがったり、遺言をしたりしたがる人に限って、うんざりするほど長生きするものなのでね。三浦のお祖母ちゃま（太郎の父・三浦朱門の母）だってうんと若い時から、遺言をしておられたけれど、亡くなった時は八十九歳でした。私たちはそれをとてもおもしろがって、時々からかってましたけど、それはそういう形でお祖母ちゃまの長命を喜ぶのが一番自然だったから。

私も今年、六十、還暦になります。実は昔から、六十あたりを切りにして、あなたに書き残す言葉を纏めておこうと思っていたのですが、いざとなると、何よりめんどうでもあるし、改めてそんなことをするのも何だか芝居がかっているようで気恥ずかしくてね。ずるずるべったりにや

めようかしら、と思っていた矢先、今度編集部からきっかけを与えて頂いた時には、内心渡りに船という感じでした。政治家は、金や動機を私物化してはいけないらしいのですが、作家というやくざな職業では、人生の動機をどんなに浅ましく私物化してもいいことになっていますから。

なぜ六十で遺書かと言うと、六十を過ぎれば、もういつ、突然或る日、自分の人格の崩壊・喪失を体験するかもしれないからです。たとえ今はまだ大して惚けていなくても突然の変化の起きる確率は六十を過ぎるとずっと高くなってきます。肉体的に死ぬこともありましょうし、体は生きていても、顕著な精神能力の後退や人格の変質を起こすこともありえます。ですから、適当な時に、一応人生の切りをつけて、友人・知人にご挨拶を済ませておくことも、いいことかと思っていたのよ。何しろ、老化の一つの特徴は、感謝の念が薄らぐということでもあるようですから。

つまり私はお世話になった皆さんに、私がいつ死んでも深く深く感謝していたということを六十くらいで一応申しあげておきたかったの。何かあったら、このことを皆さんに伝えてください。

こういうものを書き残すのは、今度が初めてですが、その中には、あなたに、親が犯したのと、同じ轍（わだち）を踏んで失敗させたくないという気持ちがあるからでしょう。世間はそれを親の愛だなどと言いますが、怪しいものよね。

あなたがまだ小さかった或る日、朱門はあなたが池に落ちるのをじっと見ていました。もちろん落ちるとすぐに、あなたのエプロンの紐を摑（つか）んで引き上げたのですが、それは、朱門の教育の

方針だったんでしょう。間違って痛い思いをしなければ、人間は骨身に染みてわからないから。

ところが、これだけのことが女親にはなかなかできないのね。理由は簡単です。その日一セット、余分に子供の服を洗濯したくないからなのよ。それと、耳に水が入らないかしら、とか、水を吸わないかしら、とか、つい余計な心配をする。そして目先の危険に心を奪われて、人生でほんとうに味わうべきことも味わわせないのです。

そもそも子供が親の犯した愚かさを繰り返すといけないから、それを未然に防ぐために書き置きをしようと思うのも、余計なお世話でしょうね。子供の方が親より利口で、親のようなばかな真似はしない、というケースもあるでしょうし、人間、思い知るには、同じような間違いを犯してみるほかはない、という場合も多いからです。人間は体験しないうちから知識としてそれを知るということは可能な筈ですが、事実はなかなかそういきません。

私は砂漠で何度か暮らしましたが、初めの時は、人に教えられたり、本を読んだりして思いついた装備を充分に用意して行ったつもりでした。

懐中電灯もその一つです。シナイ半島の砂漠で野営していた或る夜、私は夜中に「自然に呼ばれて」眼を覚ましました。私は砂漠でやっと一メートルほどの丈に伸びた灌木の下に寝袋を置き、ハンドバッグを枕に眠っていたのです。起き上がってあたりを見ると、暗闇によく順応している眼には、数キロ離れたところにある岡のシルエットなども見えています。これなら大丈夫だ。五

十歩歩いて五十歩戻る。そうすれば、必ず自分の寝袋に辿りつける。

こう思って私はその通りに砂漠を歩いたのよ。砂漠には大きく分けて、岩ばかりの岩漠、土の多い土漠、そして純粋に砂と小さな石粒の砂漠、と三種類があります。もしそこが岩漠だったら、夜は五十歩歩くこともよほど注意しなければならないの。何故って深い亀裂があって、人間がすぽんと落ちてしまう危険があるから。しかしそこは砂漠だったから、私は何も問題はない、と思ったのです。

しかし戻りかけてみて、私は恐怖で心臓が縮みかけました。どうも全く違う角度へ歩いていたらしいの。私は寝袋を見つけられなかったんですからね。遠くの岡だって厳密な方向を示す手掛かりには全くなっていませんでした。

もちろんすぐに私は、別に慌てることはない、と自分に言い聞かせました。そこで叫べば、同行の誰かが起きて迎えに来てくれるでしょう。しかし夜中に人を叩き起こしたくないと思ったら、夜が白むまで、私はその場に座っていればいいんです。少し夜明けの光があるようになれば、すぐに、わずか数十メートルのところに自分の寝袋があるのを見つけられることはわかり切っているんですから。

その時初めて私は、日本の生活では、標識になるどこかの明かりや、方向を自然に導いてくれる道というものに私たちが馴れ切っていることを知ったのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

田舎の道では、街路灯みたいなものも全くなくて、月のない晩には懐中電灯を持って歩かねばならないことがありますが、それでも、道そのものが、私たちの行くべき所へ導いてくれるのね。しかし砂漠はいささかの方向性も私たちに示さないから、私たちは必ず二個の光源を持つべきだったのです。一つは自分がスタートしたところに置いて、そこを帰るべき地点として確認する。もう一つは自分が携行していく光で、それで足元を照らす。

世の中のことを、すぐ教訓的に見る、という姿勢を、私は好きではありませんが、私たちの生き方にも、常に光源が二つ要るというのは本当ね。目標を示す光と現実を見せつける光、というふうに解釈してもいいし、出発用の光と、帰って来る時のための光というふうに考えてもいいかもしれない。帰るべき我が家の灯が見えないと、人は休まらないでしょう。その灯は私たちが死んでどこへ行くかということを示す光でもあるかもしれません。

砂漠のサバイバル方法の話に戻りますが、もう一度は、私はまっ昼間に岩漠を歩き廻っていて、帰れなくなりそうになったことがあります。道がない岩場というものは正確に逆に戻れない。タバコ屋さんの角を曲がって、というわけにいかないから。皆のいるところは大して遠くない所だとわかっていながら、帰る方向がわからないの。その時も一瞬だけれど、ほんとうにサハラの一部であるタッシリの、奇岩怪石の続く無人の岩漠から、永遠に脱出できないのかもしれない、と震え上がりました。

そんなもんでしょうね。私たちは誰でもが、一々初めから学ばねばならないんです。ことに私は学校秀才でなかったから、割と自然に失敗しては学んで来たのよ。だから、親が子供が失敗しないように言い残そうなどということが、いかに思い上がりかよくわかります。

そういう生活を六十年もしてくると、どういう気分になるかというと「自然に、そしていい加減に」ということのきれいさが段々わかるようになりました。それは今のあなたにはあまり縁のない境地でしょう。

これは褒めて言っているのだけれど、あなたは割と厳密で凝り屋で、趣味で深入りしたり、最善を尽くそうとして眠れなくなったりする人ね。学者という職業はそういう「しつこい」ところがなければならないんでしょうね。

朱門がよく言うのだけれど、作家と学者との間には、職業上の基本姿勢に大きな違いがあるんですとさ。どう違うかと言うと、学者は嘘のことを書いたら怒られる。しかし作家はほんとうのことを書いたらモデル問題で訴えられる。「だから学者は大変ねえ」と笑ってます。

どんなに抗ったって、人間、定められた運命以上のことはできません。ただ運命に流されながらも、希望の方向くらいははっきりと持ち続けていて、小さな悪足掻きをすることくらいは自然でしょう。そうするとそのけちな悪足掻きが、思いの他大きく流れの方向を転換させる力になることもあるのです。

しかしそんなに、努力しなくていいのよ。流されることを愛してください。そして流されながら、しかし最後まで、小さな希望だけは明確にしているという生き方をしてください。「いい加減」という言葉がこの頃私は大好きです。これは、いい言葉なのよ。塩味、お風呂の温度、花の咲き具合、それぞれにいい加減というものがあります。同じ個人でも、日によって状態によって好みも変わります。一杯目の茶はぬるく次は熱かったことを褒めた人もいるし、今日は少し辛い味で食べたい日もあれば、寒風の中を帰って来た時には熱めのお風呂に入りたいものなのよ。

とにかくのんきに、いい加減にやりましょう。

今朝方、アメリカのベーカー国務長官とイラクのアジズ外相とのジュネーヴ会談は決裂しました。

サウジの砂漠に入った六十万の多国籍軍が、毎日いっせいに砂漠でシャワーを浴び排泄(はいせつ)をすると、戦った後の砂漠はどうなると思う？　これは一種の壮大な実験です。緑化が進んで羊の草が多くなりすぎませんか？　羊の価格は暴落しているというのに。ピントの狂ったあなたの母親は、そんな心配をしています。

一九九一年一月十日

曽野　綾子

曽野綾子様

子供の時から、文章を書くのはおっくうでした。親が作家なのだから、作文が多少うまくても当然だと決めつけられるのが不本意だったのです。幸い、今は大学の教師でいます。授業や会議などひと通りの義務をこなせば、とりたてて原稿など書かなくても、クビにはならない有難い職業です。しかし、今回、この往復書簡を書くことになりました。滅多にない機会なのですが、やはり、少し気が重い感じです。いい年の息子が、母親宛に長々と三千余字もの手紙を書くことも、やや不自然に思えます。これは私自身の感覚がひねくれているからだけではなさそうです。

事実、一部のアフリカ社会などから報告されるのですが、息子が成長すると母親との接触を避け、一種の忌避的関係に入る例を見受けます。これは、喧嘩別れするというのではなく、互いの立場を尊重するために、敬意を払いながらも積極的なコンタクトを避けるのです。親子間の摩擦を防ぎ青年に独立を促す部族社会の知恵なのでしょう。しかし、私はそうした先人の知恵を顧みず、母親と手紙をやりとりし意識的な接触を持つことになります。しかも、その手紙は遺書のつもりで書かれたというのですから、緊張せずにはいられません。

遺書は、本来、その返事が書かれることのない書状です。しかも、死者の遺志は極めて重視され、生者はおもてだってそれに文句をつけることはできません。ですから、内容が納得できない

時は、遺族は遺書をにぎりつぶすという奥の手を繰り出すわけです。しかし、今回の「遺書」は、はなはだ趣が違います。私はこのようなあからさまな場で、それを読み返事を書くことになりました。無視するという奥の手も使えそうにありません。どうも、ジェット戦闘機に無力な竹槍突撃を試みるような気がします。おそらくはぎこちない対応を綴ることになるでしょう。

しかし、腹をきめました。この場合のぎこちなさも、元はといえば、親子の間のいろいろな思い入れのため、理路整然とした話に終始できないからでしょう。しかし、親子の間の対話など、いくら頑張ったところで、たかだか感情論の成れの果てにすぎないのです。ぎこちなくて当然と割り切って、書き始めることにしましょう。

さて、今年で私は三十六歳になります。大学に入学して以来、人生の半分をキャンパスで過ごした計算です。普通の人であれば、わずか四年間だけを過ごす空間に、ずっとうごめいていたわけですから、多少は感覚的におかしくなったかもしれません。論文で、「○○とは言えないが、△△と言うこともできないとするのが、妥当であろうと推察される」などという意味不明の悪文も書けるようになりました。酒場でテーブルの上に跳び乗って、「ダッタン人の踊り」を演じても、少しも恥ずかしいとは思わないようにもなりました。しかし、幸いに、「学者は作家と違って、ほんとうのことを書かなければならない」などという尊大な思い込みをするには至っていません。むしろ、ささやかにせよ研究の経験をつむごとに、「ほんとうのことなど誰もわからない」という

印象が強まっています。

研究者としての私の関心は、イスラーム教がフィリピンやボルネオにどのように伝わっているかという点です。しかし、わからないことだらけ。もし、「ほんとうのこと」しか書いてはいけないのであれば、間違いなく一生、何も書けないでしょう。そもそも、研究の基礎となる資料自体、情報の出所により随分とニュアンスが違い苦労します。

イスラームの指導者サイドなどからは、都会のモスクではアラビアさながらの礼拝が行なわれ、本場そのままの宗教活動が展開されているかのような表現もなされます。しかし、田舎を調査した研究者は、住民はイスラーム教徒と称してはいるものの、むしろ樹木や巨岩に宿る土着の精霊達を熱心に崇拝するというのです。

基礎的な資料からしてあれやこれやですから、研究を進めるにあたって、データを整理し結論づけようとすれば、どうしても研究者の主観が入ります。実際、このあたりのイスラーム教の性格は、イスラームが土着の宗教を吸収しながら根深く浸透していった姿とも言えるし、地元の人人が世の中のしがらみとして、お体裁だけ受け入れたイスラームの姿とも言えるのです。私自身は後者の見方のほうが好きですが、どちらのとらえ方も、現地の文化の特徴を示唆していて、優劣はつけられないものです。

だから、研究を続けていると、事実はどうかという判断しにくい問題ではなく、むしろ、多く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com